

日本統計学会会報

NO.117 / 2003. 10.24

発行——日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-6569 Tel 03-3442-5501 Fax 03-3442-5924
編集責任——国友直人（理事長）／南美徳子（庶務理事）
宿久 洋（広報理事）／大屋幸輔（広報理事）
振替口座——00190-2-61361
銀行口座——みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 卷頭隨筆：「学会と政府統計の関係を考える」	吉澤 正…1
2. 第8回日本統計学会賞について	4
2.1 第8回日本統計学会賞	4
2.2 受賞のことば	
杉浦成昭・長谷川政美・松田芳郎…5	
3. 新名誉会員の紹介	7
4. 日本統計学会小川研究奨励賞	8
4.1 受賞者と対象論文	8
4.2 受賞者および対象論文の報告	8
4.3 小川研究奨励賞を受賞して	8
5. 統計関連学会連合大会	9
5.1 実行委員会委員長報告	9
5.2 企画委員会委員長報告	10
5.3 コンペセッション報告	10

5.4 コンペセッション最優秀賞・優秀賞受賞者の言葉	
島津秀康・逸見昌之・小西葉子・清智也…11	
6. 2004年度統計関連学会連合大会について	
柴田里程…13	
7. ISI 2003に参加して	13
8. 計量経済・計量ファイナンス分科会について	
森棟公夫…15	
9. 研究部会新設公募	15
10. 科学研究費への応募促進について	15
11. 日本学術会議報告	16
12. 第71回日本統計学会総会報告	17
13. 2002・2003年度第6回理事会議事録	21
14. 会合案内	23
15. 事務局から	25

卷頭隨筆

1 学会と政府統計の関係を考える

統計センター理事、帝京大学教授 吉澤 正

本学会が、統計関連学会との連携による連合大会をはじめ、関係者のご努力によって活発な活動を展開されていることに、まずは敬意を表したい。2003年は、国際統計協会（ISI）の第54回セッションがベルリンで盛大に開催され、日本からも多数の参加者があった。また、多くの衛星会議が開かれ、筆者は、ISIセッションのほか、8月8日と9日にポーランドのシチェチンで開催された衛星会議に出席する機会を得た。それは、「統計機関¹⁾の基本機能を検証する（Examining the Essential Functions of Statistical Organizations）」というタイトルで、ISIとポーランド中央統計局の主催であった。

近年、欧州では、EUの進展に従って、データに基づくdata-basedな議論や政策立案が重視され、政府統計（Official Statistics）²⁾の品質の改善や国際比較性の向上が盛んに議論されるようになっている。英国をはじめ各国で使われ日本でも話題になっているマニフェスト（政党の公約リスト）でも、数値目標が出されるようになり、その数値の統計的な理解が重要になっている。また、公的機関の経営のあり方についても、民間と同じように、その透明性やそれを実証するための第三者による監査や評価がさかんになり、グローバル化した国際社会での製品や食品の安全性に関する製品認証、品質や環境などのマネジメントシステ

ムの審査登録制度を含む適合性評価制度が浸透するようになっている。

さらに、各国政府の予算削減や行政の効率化を目指す動きの中で、政府統計も聖域ではなくなっている。オランダの例では、2004年には統計予算を10%削減することが1999年に決められており、厳しい改革が実施されている。そのような厳しさの中で、民間経営においても、品質や安全を忘れていき過ぎたコスト低減活動に起因するような事件、大事故、あるいは不祥事が続発しているが、内外の政府統計に関連しても、関係者・国民の信頼を大きく損なうようなミスやその隠匿問題などが起きている。また、統計調査における回答者の負担が大きくなったり、プライバシー保護の意識変化もあり、そもそも調査回答者として、最も重要な関係者である国民や企業へのフィードバックやその理解を求める活動の重要性が増している。

そのような背景から、統計機構においても、その基本的な機能を再検証し、各統計機関の経営面の品質を継続的に改善してそのアウトプットである政府統計の品質を維持し向上させようとする意識が強くなり、ISIのみならず、各種の国際機関で、特に欧州では欧州統計システム(Eurostat)の確立を目指して、統計の品質や統計機関の品質などに関する議論がさかんとなり、関連会議も頻繁に開催されている。

わが国の政府統計でも、統計審議会によって1985年に「統計行政の中・長期構想」、1995年に「統計行政の新中・長期構想」が答申され、今年は、関係省庁による「統計行政の新たな展開方向」という報告が総務省統計局³¹から発表され、統計行政のあり方について、その方向が示された。これについては、ISIセッションや本年の連合大会でも報告されている。

さて、ポーランドの会議では、政府統計機関における一般的な課題、すなわち、社会の情報時代における将来像を見据えた統計体系の戦略策定やその基本的な考え方、情報通信技術の活用、統計機関の機能と体制、責任と権限の委譲、統計機関の経営、統計の品質や信頼性、人材育成や人的資

源管理、統計の提供や普及問題などについて、各國統計機関の革新・改革の事例や考え方の変化が報告された。それらの報告はウェブサイト(<http://www.stat.gov.pl/ISI.htm>)でも見られる。

その会議で、上述の課題とは異なる角度で、筆者が注目した一つは、現在ユネスコの統計研究所のディレクタを務め、ISI副会長の一人としても活躍しているDenise Lievesley女史による「政府統計に関する専門職学協会の役割」という講演である。彼女は、1999年から2001年にイギリスのRSS(王立統計学会)の会長を務めてもいる。その講演の中で、伝統のあるRSSが国家統計とこれまでいかなる関係を保ってきたかという背景を述べてから、最近発表された国家統計の将来への“ビジョン”を簡単に紹介し、以下10項目程度の個別課題を手短に論じた。

ビジョンでは、国家統計発展のための支援環境を作ること、国家統計の改善、開発、よりよいアクセス可能性に関して、技術問題を含むすべての問題を議論できるフォーラムを提供すること、国家統計の品質、公平な包括性、開放性を促進するための方策を検討すること、恐れや好みにとらわれることなく不適切な慣行を非難すること、国家統計に携わる専門家が脅威にさらされる際には積極的なサポートを行うことなどが含まれている。

そして、個別課題としては、政府統計官とRSSとのバランスの取れた関係、統計課題に対して学会がとる意見や立場を主要な関係者へ伝達すること、議論のためのフォーラムの場としての学会、利用者意見の代表、統計利用のためのコンサルティング、EUの進展など国際的次元での統計の変化に関する情報交換や学会の支援、調査項目の優先度決定に関する利用者としての参画、政府統計の品質向上の推進、政府統計と統計研究者や産業界などのギャップの橋渡しなどに論及された。

ひるがえって、わが国の政府統計と学会との関係を考えてみると、近年、日本統計学会大会への政府関係者の参加や発表、セッションテーマとしてあるいは大学研究者による政府統計関連の研究発表が増加しており、大変好ましい傾向と思われ

る。公的な統計機関に所属する統計専門家にとって、日本統計学会は、研究発表や自己啓発のための重要な場になってきたといえよう。また、政府統計に関する研究の発展にも寄与していくと思われる。

そもそも、日本の学協会は、一般には日本学術会議に登録され、一部が社団法人であるほか、多くは小規模の任意団体である。近年、日本学術協会でもそのあり方が議論され、たんに学者研究者のアカデミックは集まりというばかりではなく、学会が、専門職の使命を明確にし、その職業的倫理を保持し、その権利を守り、継続的職業開発(CPD: Continual Professional Development)の場としての機能をもちつつ、各分野の学問・学理の発達に寄与するように期待されている。この面から、学会は、その分野を職とする専門家を支援する団体として機能することも求められている。

一方で、日本統計学会は、政府統計の利用者として重要な研究者・教育者の集まりであり、利用者の立場を代表して、政府統計の基本的なあり方からその改善、その提供方法のより一層の利便化などに積極的に発言できる組織もある。政府統計は、そもそも、政治行政に対して中立的な立場を堅持すべきものであり、日本の政府統計はその立場を確固とした態度を守ってきたと評価されるが、学会もその統計の中立性を支援するとともに、学会独自の立場から、日本の統計の健全な発展のために建設的ときには批判的な意見をいうべきであろう。

本年平成15年度より、総務省統計局から、統計センターが、独立行政法人として分離され、統計センターは、改めて政府統計の中央集計センターとしての使命を担うことになった。日本の統計機構は、所管省庁別に分散型作成になっているが、統計センターは、国勢調査、事業所・企業統計調

査、住宅・土地統計調査、就業構造基本調査、全国消費実態調査、全国物価統計調査、社会生活基本調査、サービス基本調査、労働力調査、小売物価統計調査、家計調査、個人企業経済調査、科学技術研究調査の製表業務（データの審査・入力・集計を含む）のほか、多数の委託製表を行うものである。政府統計は、国民の生活・社会・経済、あるいは環境問題に関わる基本データを提供するものであり、その作成には、企画、実査、調査表審査・入力、集計、公表といったプロセスがある。企画や実査は従来どおり統計局統計調査部が責任を持ち、統計法に基づく統計基準への適合に関する審査などは統計局統計基準部が担当している。

本年度は、先に触れたように「統計行政の新たな展開方向」が発表され、統計機構についても大きな改革が行われた。これらが日本における政府統計の発展に寄与するには、日本統計学会の貢献が不可欠である。これまでも、学界は、統計審議会をはじめ、多くの場や個人的な立場から、マイクロデータの利用の促進や過去の調査表データの保存などにに関する要望が出されてきたが、今後、日本統計学会としての学会としての役割や活動の強化が期待される。

-
- 1 日本では、統計機関の訳としてStatistical Organizationsが使われるが、ここでは、個別の機関という意味合いで統計機関とした。
 - 2 日本統計学会では、統計は、広い意味で使っているのであろうが、日本政府では、統計といえば、政府統計のことであるが、それを官庁統計ということもある。英語では、official statistics、あるいはnational statisticsといわれる。ここでは、official statisticsは政府統計、national statisticsは国家統計とする。組織や名称についても、各国さまざまである。
 - 3 統計審議会の任務の変更により、この報告は、主として各省の統計関連部署から構成される委員会で検討された。

2 第8回日本統計学会賞について

2.1 第8回日本統計学会賞（2003年度）

「日本統計学会賞」の第8回受賞者は、
杉浦成昭（中央大学）
長谷川政美（統計数理研究所）
松田芳郎（東京国際大学）
の方々に決定いたしました。受賞者の皆様には、
それぞれ賞状と副賞の時計が贈呈されました。受
賞された3名の方々の受賞理由と略歴は以下の通
りです。

[1] 受賞者名：杉浦成昭氏

略歴：1935年生、1975年広島大学総合科学部教授、
1976年東京教育大学理学部教授、1998年日本女子
大学理学部教授、2003年中央大学大学院理工学研
究科客員教授。

受賞理由：多変量Wilcoxon検定などのノンパラメ
トリック統計学や多変量解析の漸近理論、および
多変量検定の諸性質の研究において大きな貢献が
あった。また線型回帰モデルなどにおけるAICの
バイアス評価をはじめとし、データ解析への応用
につながる重要な研究を行った。

主要業績：“Unbiasedness of some test criteria for the
equality of one or two covariance matrices.” (1968),
Ann. Math. Statist., 39: 1686-1692, with H. Nagao.

“Asymptotic expansions of the non-null distributions
of the likelihood ratio criteria for multivariate linear
hypotheses and independence,” (1969), *Ann. Math.
Statist.*, 40: 942-952, with Y. Fujikoshi.

“Derivatives of the characteristic root of a symmetric
or Hermitian matrix with two applications in
multivariate analysis,” (1973), *Commun. Statist.*, 1:
393-417.

“Further analysis of the data by Akaike's information
criterion and the finite corrections.” (1978),
Commun. Statist., A7: 13-26.

[2] 受賞者名：長谷川政美氏

略歴：1944年生、1986年統計数理研究所予測制御
研究系教授、1999年総合研究大学院大学先導科学
研究科教授併任、1999年東京大学大学院理学研究
科教授併任。

受賞理由：分子データに基づき、生物の系統分類
を統計的に行い、分子系統学において世界をリードして
きた。とくにこの分野における統計科学の
重要性を主張し、データ解析を通じた方法論を構築する
とともに、現在世界で広く用いられている
たんばく質分子系統樹作成プログラムパッケージ
を開発した。

主要業績：“Dating of the human-ape splitting by a
molecular clock of mitochondrial DNA,” (1985), *J.
Mol. Evol.*, 22: 160-174, with H. Kishino and T. Yano.
“Evaluation of the maximum likelihood estimate of
the evolutionary tree topologies from DNA sequence
data, and the branching order in Hominoidea,”
(1989), *J. Mol. Evol.*, 29: 170-179, with H. Kishino.
“Dating the common ancestor of organisms,” (1996),
Science, 274: 1750-1750, with W.M. Fitch.
“The platypus put in its place.” (1997), *Nature*, 387:
549-550, with D. Penny.

[3] 受賞者名：松田芳郎氏

略歴：1935年生、1979年一橋大学経済研究所付属
日本経済統計文献センター教授、1999年東京国際
大学経済学部教授。

受賞理由：明治、大正期の会社と工場のデータを
名寄せ集計しデータベースを作成するなど大規模な
歴史統計資料の編集・公刊に中心的役割を果たした。
また統計審議会委員・専門委員としてわが
国の官庁統計の改善に努めるとともに、官庁統計
の個票データの公開にむけて努力してきた。さら
に、中国をはじめとする発展途上国の統計、統計
制度の研究および教育に先駆的役割を果たした。

主要業績：「データの理論」(1978) 岩波書店。

「中国経済統計方法論－変容と現状－」(1987) アジア経済研究所 (研究叢書361)。

“Economic and social aspects of the performing arts in Japan.” (1988), Kinokuniya, with Y. Kurabayashi.

「企業構造の統計的測定方法」(1991) 岩波書店。

2.2 受賞者のことば

[1] 受賞者のことば

杉浦 成昭

今回多変量解析の分布論や赤池情報量基準の有限修正等の業績が認められ名誉ある学会賞を受賞し感謝しております。顧みますと1962年に統計学会に入会して以来学会とは長いおつきあいとなりました。若い方の御参考までに当時の論文誕生の経緯をお伝えしたいと思います。

多変量解析につきましては当時未解決であった問題（多変量線形仮説の尤度比検定統計量の非心分布の漸近展開等）を先輩方からいろいろ教わりいくつかの問題を解決出来たのが嬉しい思い出として残っています。身边に第一線の研究者がいることが如何に大切かという例になっていると思います。

有限修正の論文 (Commun. in Statist. Vol.7 Ser. A 13-26 1978) は当初Refereeから却下されました。Kultback-Leibler情報量に基づく分析や回帰分析ならF-統計量の調整やMallowのCp統計量等で十分であり今さら新しい基準など必要無いというものでした。普通はしないのですが、このときばかりは長文の反論の手紙をEditorのOwen教授に書き赤池情報量基準が如何に広汎の分野に適用可能なものか、最尤推定量の漸近正規性に基づいているから有限修正はもし可能なら必要である事を訴えました。幸いEditorは反論に好意的で、Refereeから論文の論旨に誤りがないことおよび新しい結果であることに同意するという承諾をとった上で内容の価値について専門家の意見が違うときは、自分は論文を掲載してその価値判断は時間にゆだねたいとしてやっと掲載されました。当時は未だ赤池情報量基準は余り世界に知られていないくて、EditorがRefereeの意見に従っていれば私の論文は

多分世に出ていなかったと思います。後で知ったのですが、赤池先生御自身が外国で赤池情報量基準を納得してもらうのに当時大変苦労されたそうで私には他人事に思えませんでした。

ここ数年大会は盛況になり若い方も大勢見かけるようになりました。今後独創的な国産のデータ科学や統計理論あるいは適用例等が一つでも多く出てくることを願っています。

[2] 受賞者のことば

長谷川 政美

このたび日本統計学会賞という栄誉ある賞をいただき、光榮である同時に、今後もこの賞にふさわしい研究活動を続けなければという思いであります。

この機会に統計学会員の皆様に、私の研究内容を紹介させていただきたいと存じます。私の研究分野は、分子系統学というものです。生物進化の歴史は、それぞれの生物のもつDNAに刻まれており、DNAの配列データから過去の進化の歴史を推測することが、分子系統学の役割です。從来このような役割は、化石や現存生物のかたちを比較することによって行なわれてきましたが、似た環境のもとでは似たかたちが独立に生じる収斂進化という現象が頻繁に起こっていることが知られるようになってきました。そのためには、かたちが似ているというだけでは進化的に近縁な関係にあるとは言えないことが次第に明らかになってきたわけです。このことはかたちの進化が生物の適応と大きく関わっているからです。それに対してDNAの進化は、DNAがコピーされて親から子に受け渡される際に生じるエラーによるものです。もちろんこのエラーがたまたま環境に適応する上ではらしい性質を生み出すものであれば、進化の過程で残っていくことになりますし、病的なものであればその個体は生き残れず、そのようなDNAは生物集団から消えていきます。ところが、実際のDNA進化の過程で残ってきた変異の多くは、適応とは関係のない中立的なものであるということが分かってきました。従って、かたちの進

化については定量的なモデル化が難しいのに対して、DNAの進化については確率モデルを構築することが比較的容易であり、それを用いて過去の進化の歴史を統計的な方法で推測する分子系統学的な解析が可能なわけです。

近年の分子生物学の目覚しい発展に伴い、DNA塩基配列のデータが急速な勢いで生み出されています。生物のもつ遺伝情報のひと揃えをゲノムと言いますが、最近では多くの生物種でゲノム全体のDNA塩基配列データが生み出されるようになってきました。ゲノムのデータは一つの生物種単独ではたいした情報を持ちません。いろいろな生物種のゲノムを比較することによって、得られる情報は飛躍的に多くなります。それぞれの生物のもつゲノムの違いは長い進化の歴史の産物でありますから、比較ゲノムの基本は進化的な視点であり、統計的な方法が重要な役割を果たします。分子進化の素過程は、確率過程とみなすべきものだからです。統計科学に携わるものとしては当然、最尤法が最も自然なやりかたになります。

ところが、この分野において最尤法のような確率モデルに基づいた統計的な解析の重要性が認められるようになったのは極く最近のことなのです。分子生物学者は統計的な概念になじみがなかったということと、最尤法はあまりにも膨大な計算量を必要とするために敬遠され、もっと簡便なアドホックな方法が長い間使われてきたのです。1980年代の後半に、岸野洋久さん（現・東大）と共同で現在KH-test（岸野・長谷川検定）と呼ばれている最尤系統樹の確からしさを評価する方法を開発しました。その論文をこの分野の専門誌に投稿したところリジェクトされてしまいました。この分野のひとにとっては数学的過ぎるということ、そもそも最尤法は生物学の実際問題に適用するには必要な計算量が膨大すぎるので、この検

定法も実際の役には立たないだろうというの、リジェクトの理由でした。別の専門誌に投稿したところ、幸い受理されました（Kishino and Hasegawa, 1989）。1990年代に入ってコンピュータの能力が飛躍的に高まったことに伴って、最尤法も実用的な方法とみなされるようになり、KH-testも次第に広く用いられるようになってきました。

このように私が分子系統学の研究を始めた頃には、分子系統学やDNAデータの解析に統計的な方法が重要であるという認識は、この分野の研究者の間にはあまりなかったのです。ところが最近では、むしろそのような重要性は広く認識されているものの（Vingron, 2001），そのような方法を開発する統計科学者が極端に少ないというのが現状です。ゲノムプロジェクトの成果として生み出される膨大なデータを前にして、そこから意味のある情報を抽出するためのデータ解析法の研究者があとたくさん参加することが望まれています。そのことは、当該科学の進歩にとって必要なだけではなく、統計科学がさらに広がりをもって新たな問題を開拓するためにも望まれることだと思います。

引用文献

- Kishino, H. and Hasegawa, M. (1989) Evaluation of the maximum likelihood estimate of the evolutionary tree topologies from DNA sequence data, and the branching order in Hominoidea. *J. Mol. Evol.*, 29: 170-179.
Vingron, M. (2001) Bioinformatics needs to adopt statistical thinking. *Bioinformatics*, 17: 389-390.

[3] 受賞者のことは

松田 芳郎

次号に掲載。

3 新名誉会員の紹介

下記の通り、新しい名誉会員が9月2日の評議委員会にて推举され、9月3日の総会にて承認されました。

●杉山 高一（中央大学教授）

推薦理由：杉山高一氏の研究領域は数理統計学及び数理統計学の応用である。特に統計的多変量解析の理論分野における研究上では顕著な貢献があり、標本固有値と標本固有ベクトルの精密分布に関する一連の研究は国際的にも高く評価されている。また、その他にも統計的多変量解析の分野を中心に様々な数理統計分野における理論的研究を発表されるとともに、様々な実際的な問題へ統計学を応用された。さらに、研究教育分野では統計学に関する幾つかのすぐれた教科書を公刊するなどの活動を通じて統計学の普及にも貢献されている。

杉山高一氏は長年にわたり日本統計学会評議員として学会の発展に努められ、庶務会計担当理事、会計監事、専門会員会担当理事、理事長などの仕事を通じて日本統計学会の運営に貢献された。とりわけ2001年・2002（暦）年度には日本統計学会会長として、学会を代表して内外における学会の発展に大いに貢献されました。同氏は、青山学院大学・オーストラリア国立アデラード大学・数理統計研究所等を経て長年の間、中央大学において研究・教育活動に邁進され、現在も同理工学部大学院研究科委員長を勤められている。この間に約30年間にわたり統計学分野に関わる科学的研究チームなどの活動を通じて統計学の研究推進にも貢献されている。

●藤井 光昭（東京工業大学名誉教授）

推薦理由：藤井光昭氏は、昭和35年に統計数理研究所研究員に、そして昭和38年に東京工業大学にご奉職以来、44年の長きに渡り、統計理論の研究並びに後進の教育育成に努めて来られました。

特に、日本における時系列解析のパイオニアの一人として研究に邁進するとともに、この分野の多くの研究者の育成に大きな功績を残していらっしゃいます。また、昭和36年に統計学会の会員になられて以来、評議員、会誌編集担当理事を歴任されるとともに、昭和55年より4年間に渡り理事長の要職を努められ、学会の発展に大きな功績を残されていることはご承知のとおりです。また、統計学会以外にも、応用時系列研究会の副会長、会長の職に計11年の長きに渡り在職され、日本の時系列解析の応用と普及にも大きな足跡を残されています。さらに、文部省学術審議会専門委員の職に計9年、日本学術会議会員と統計学研究連絡委員会委員長を3年間努められ、日本の学界における統計学分野の地位向上と発展に尽くされました。さらに、平成10年以来財団法人日本統計協会理事の職にも就かれています。このように、藤井光昭氏のこれまでの足跡は、まさに日本の統計学と統計学界に対する無私の献身という言葉意外で表現のしようがない巨人なものであります。また、東京工業大学では理学部長、そして自ら設立に陣頭で奮闘された情報理工学研究科の研究科長を歴任されました。平成8年に特に請われて大学入試センターの副所長に転任されて以来、入試センター試験の円滑な実施に奮闘されるとともに、社会的問題にもなった、センター試験の科目間格差の是正に関しては統計家の立場から、公正な格差の是正方法を提案するなど、学会以外でも目覚ましい活動を続けていらっしゃいました。

●鍋谷 清治（一橋大学名誉教授）

推薦理由：鍋谷清治氏は、1940年代後半より50年以上にわたり世界の統計学の発展に寄与されてきました。初期においては多変量解析の分野で大きな貢献をなされております。当時の代表的な業績としましては二変量正規分布の絶対モーメントや二次形式の独立性に関する研究があります。特

に前者はT.W. Andersonの多変量解析のテキストにも引用されていることは周知のことと思われます。現在では当たり前のことが終戦後直ぐに我が国においてもこの様な世界的な結果を導いたと云うことは十分賞賛に値すると思われます。一方、二次形式の独立性についても必要条件を求め、その結果は小川潤次郎氏により紹介されております。また、最近では特に田中勝人氏との共同研究

の中でフレドホルム積分方程式メソッドと呼ばれる新しい方法の確立に多大な貢献をなされております。この方法は特に単位根検定問題から派生する分布論において、それまでシミュレーションでしか分布を求めることが出来なかった問題に対する解析的な方法を与えるものとして特に時系列解析の分野で高く評価されているものであります。

4 日本統計学会小川研究奨励賞

4.1 受賞者と対象論文

受賞者：柿沢佳秀（北海道大学経済学研究科）
対象論文：Edgeworth approximation in the AR (1) process with some possibly nonzero initial value. *JRSS Vol.32 No.2, 209-237.*

4.2 受賞者および対象論文の報告

早稲田大学理工学部 谷口 正信

時系列解析における高次の漸近理論はこの20年間ぐらい大きく進展してきた。この分野における日本人研究者の貢献は極めて大きく、受賞者もその貢献をなしている若手研究者のなかの1人である。対象論文は1次の自己回帰過程における係数の一般化最小2乗推定量のクラスに対して、任意次数のEdgeworth展開を初期値がゼロとは限らない設定で導出した。モデルは特殊であるが、漸近展開も所謂formalなものではなくvalidなものを求めており、任意次数の展開を誤差評価もふくめている点は、種々の応用が期待され意義あるもので小川研究奨励賞にふさわしいものと思われる。

柿沢佳秀君は1991年に大阪大学大学院基礎工学研究科に入学以来、時系列解析、統計的漸近理論、多変量解析の研究にはげみ、標本共分散関数の漸近有効推定、時系列の高次漸近理論、時系列における鞍部点法、時系列判別解析、ピークインセンシティエヴァンスペクトル推定等、多数の研究論文を書き、これらの成果をまとめて1996年に学位論文として発表している。これらはすべてhigh-standardなもので、将来、我が国の統計学を支え

るべき人材となることを確信させるものである。

小川賞は老大家の名誉賞の受賞とは異なって、奨励の意味もあるので、単なる賞賛の羅列ではなくて、鞭撻の一振りを与えることがあってもよいのではないかと思われます。報告者がこの数年感じるところでは、受賞者は、外国に行って共同研究をしたりすること（以下国際修行ということにしますが）に消極的と思われます。誤解しないでいただきたいのは、これはなにも外国崇拝に陥って言っているではありません。国内にいますと、職場、社会から目に見えない支えを常に受けているのですが、このような支えがあるとは限らない社会で自己表現をする国際修行を、受賞者のような才能に満ち溢れた研究者には是非若いうちに経験してもらいたく思われます。

4.3 小川研究奨励賞を受賞して

北海道大学経済学研究科 柿沢 佳秀

この度、第17回小川賞を授与され大変光栄に存じます。受賞論文は平成13年6月に京都で開催された時系列に関する日米セミナーの日本側の講演者としてエントリーさせていただいた際に講演内容として考察した結果をまとめた論文に相当します。漸近展開の正当化の話題はBhattacharya & Rao理論（独立分布；クラーメル条件）、Götze & Hipp理論（離散時間時系列；条件付クラーメル条件）を基礎とし、正規定常時系列過程では谷口があり、最近ではMalliavin解析アプローチ（渡辺・吉田理論、楠岡・吉田理論）にて広範囲な連続時

間確率過程へと整備されています。一般論からみたとき受賞論文は大変恥ずかしい程狭い適用範囲に限られるのでございますが、比型統計量の分布関数近似に際して分母を払うというテクニックの曖昧な部分の解明になったと個人的には考えております。

統計学を学ぶきっかけは、東京理科大学理学部塩谷寅先生ゼミナールに属したことであり、卒業研究としてグループによる論文研究からはじまり、その後大阪大学大学院基礎工学研究科で谷口正信先生の指導を受け、時系列の漸近理論研究に携わってきました。また当時の阪大月曜講話会や

土曜セミナーを通じ多くの研究テーマに接することができて、常に刺激的であった環境にいられたことも幸運であったと思っております。そして学会やシンポジウム等で有意義なディスカッションをしていただいた多くの先生方に厚くお礼を申し上げます。研究・教育により一層精進していきたいと思いますので、今後とも会員みなさま方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。略歴：昭和43年7月12日石川県生れ。大阪大学大学院基礎工学研究科数理系博士後期課程修了。博士（理学）。北海道大学大学院経済学研究科助教授。

5 統計関連学会連合大会（第71回大会）報告

5.1 実行委員会委員長報告

名古屋大学経済学研究科 和合肇

日本統計学会第71回大会は、9月2日（火）～5日（金）の4日間名古屋地区の名城大学天白キャンパスにおいて、第2回統計関連学会連合大会として開催された。本大会は、昨年に引き続き応用統計学会、日本計量生物学会との共催、また日本計算機統計学会、日本分類学会、日本行動計量学会との協賛の下に挙行された。今年はさらに日本行動計量学会も9月3日（水）～5日（金）の期間に同じ名城大学で同時開催されるため、今回の実行委員会は名古屋地区（名城、中部、南山、名古屋市立、名古屋工科、名古屋の各大学）の各学会に所属する会員を中心とし、各学会から庶務・会計担当理事、前実行委員長、企画委員長に理事長を加えた18名で共同で組織した。保育室の設置、大会期間中の受付・会場のアルバイト、ソフトウェア・書籍展示、ソフトウェアのデモ展示、大会記念写真、それに懇親会を共同で運営し、これらは共通経費として収入・支出を一本化し、後で比例配分することとした。

連合大会への参加者は、チュートリアルに227名（会員146名、非会員48名、学生33名）、大会に738名（会員514名、非会員86名、学生138名）であった。大会参加者は昨年に比べて増加し、中で

も学生会員が大幅に増えたことから、これを今後の会員数の増加に結びつけるように努力していく必要がある。今回はチュートリアル参加者の中で非会員の数が前回に比べ少なかったが、これはテーマの選択によるものと思う。懇親会参加者が当初の予想を大幅に超えたことにより、皆様に大変ご迷惑をおかけしてしまったが、そのために収支は均衡ないし若干の赤字ですむ見込みである。

連合大会の内容については別に紹介されるものと思うが、今回の特色を挙げれば企画面で新しい試みがされたこと、中でも若手研究者を中心としたコンペティション形式のセッション、従来の共通テーマに代わる公募形式の企画セッションは参加者数も多く、スケデュール的にはハードであったが成功したといえる。まだ初めての試みとして、一部関係者の大変な努力により、大会期間中保育室が設置されたことは特筆すべきであり、今後も継続して行くべきであろう。大会初日には、2つのチュートリアルセミナーが並行開催され、夕方には3人の講演者による名古屋に因んだ市民講演会「教育と統計」が開催され、好評であった。全般的には各セッションの研究報告会場の聴衆は多かったが、最終日午後のセッションならびにソフト展示には聴衆が非常に少ない会場があった点、など今後の検討課題としたい。

統計連合大会と日本行動計量学会の同時開催によって専門分野の異なる多数の学会員が参加でき、充実した討論が活発に行われた。これは多数のセッションを同時並行的に行う会場配置が可能になり、昨年末に完成したすばらしい設備を有した会場に依るところが大きい。この会場を提供して下さった名城大学関係者に感謝を申し上げる次第である。

またこの大会のために名城大学・経済経営学会から、そして保育室設置のために日本統計協会どシンフォニカからご寄付を頂いたことをご報告し、実行委員会を代表してお礼を申し上げます。次年度の日本統計学会もまた、日本計量生物学会、応用統計学会との連合大会として来年9月はじめに富士大学（岩手県花巻市）で開催される予定です。同大会が一層の盛況となるよう会員諸氏のご支援を切にお願いする次第です。

5.2 企画委員会委員長報告

成蹊大学工学部 岩崎 学

2003年度連合大会では、従来まで的一般講演セッションに加え、企画セッションとコンペティションを設けた。さらに、大会前日の9月2日にチュートリアルセミナーと市民講演会を催した。コンペティションの報告は柴田里程委員に譲るとして、ここでは、それ以外の企画について報告する。

一般講演は総計32セッション167件を数え、5ないし6つの並行セッションにて報告が行なわれた。企画セッションは、学会員諸氏に広くセッションの企画を公募し、応募のあった15セッションを実現した。15セッションのうちの3セッションは特別講演セッションであり、12セッションは企画セッションとして、各オーガナイザーの責任の下で討論者を含めた充実したプログラムが展開された。各セッションのテーマは経済統計、生物統計、計算機統計、統計教育など多岐に渡り、連合大会にふさわしいラインナップとなった。

チュートリアルセミナーは、9月2日13:30～14:30に「官序統計の理論と実際」および「実験

研究および観察研究における偏りの調整」の2テーマを並行開催した。前年度までのチュートリアルセミナーは午前、午後の開催であったが、2003年度は名古屋での大会ということで、参加者の利便を考え、並行開催とした。参加者は、2テーマ合わせて227名（会員146名、学生33名、非会員48名）であった。また、セミナー資料を別途販売し（売価：1,000円）約70部を売り上げた。

市民講演会は「教育と統計」のテーマの下、9月2日のチュートリアルセミナー終了後の17:00～19:00に開催した。参加者数の統計は取っていないが、目算で120名を超える参加者を得た。用意した200部の資料は大会期間中にすべて参加者の手に渡った。

コンペティションをはじめ数多くの研究報告があり、大会日程が窮屈なものとなつたが、実のある大会となつたと総括できよう。各セッションのオーガナイザーの皆さんのご努力にこの場を借りてお礼申し上げる。

5.3 コンペセッション報告

慶應義塾大学理工学部 柴田 里程

ご存じのように、今年初めての企画として、博士学位取得後2年を越えない会員を対象とした研究報告のコンペティションを実施いたしました。幸いにして、予想を超える24名の参加希望があり、プログラム編成上はかなり無理な面もあったのですが、当初のお約束通り、他に並行するセッションなしの形で本コンペティションを実施することができました。皆様のご協力の賜と感謝しております。特に、統計関連学会連絡委員会の委員の方々をはじめとして各学会の理事の方々には、すべての報告に出席していただくよう少々酷なお願いを致しましたが、結果的に17名の方が皆出席のうえ審査投票してくださったことは、審査結果の信頼性を高める上からもよかったです。この17名のうちには、もちろん役職に就かれているかただけではなく、積極的に審査にご協いただいた方も数多く含まれており、その献身的なご協力にも深く感謝いたします。なお、部分出席

の方の投票もふくめれば、91名の審査投票をいただいたことになります。

コンペティション参加者24名は、その申し込み順に6つのセッションで報告していただきましたが、いずれも熱のこもった報告発表であり、なかなか甲乙つけがたい印象を受けました。しかし、コンペティションである以上、優秀賞、最優秀賞の対象者を選出しなければなりません。すべてのコンペティション報告終了後、座長をお願いした連合大会参加の3学会の会長、副会長相当の方6名にお集まりいただき、審査投票結果を検討していただきました。ここでは、その検討手順を簡単にご報告させていただきます。まず、投票は記名投票で、各報告者についてA+からC-までの9段階で評価していただき、Aが授賞に値する、Bが授賞してもよい、Cが授賞に値しないという基準でしたので、まず皆出席の方の審査投票を検討し、A以上の評価が極端に少ない、あるいは、C以下の評価がいくつか見受けられる報告者を対象から外しました。その上で、A+を9、C-を1とするスコアでの平均スコアを求めたところ、分野のバランスという点からも無理に当初予定していた3名に絞るよりは上位4名を受賞者とするほうが適当であろうという結論をいただき、最優秀者として最高平均スコア7.00を獲得した島津秀康君、優秀者として逸見昌之君、小西葉子さん、清智也君を表彰することにいたしました。念のため、部分出席の審査投票を含めてみましてもこの4名のうち最優秀を含む3名が上位3位までを占め、残りの1名も5位に入る成績でしたのでこの結果で問題ないと判断いたしました。表彰式で代表して賞状と副賞を渡していただいた、応用統計学会会長の佐藤義治氏の言葉にもありましたように、受賞者と惜しくも選にもれた方との差は極めて僅差でした。本コンペティションを実施した趣旨は、よりよい研究とその報告を奨励するというところにありましたので、残念ながら選に漏れた方にはこれに懲りずにまた来年挑戦していただけるようぜひお願い致します。参加者には個別に各投票者(匿名にしてあります)の評価とコメントのコピ

ーをお送りしておりますので、今後の研究とその報告の仕方を改善する一助にしていただければ幸いです。

91名分全員の投票結果は、投票者を匿名とし、審査対象者の順番をランダマイズして同定できないようにした上で、公表する予定です。

これらのデータを解析していただければすぐわかるのですが、やはり、聴衆に何らかの感動を与えた報告が高平均でしかも分散の少ない得点を得ています。それは、審査投票者が報告技術もさることながら、単に自分の研究が進んだというだけでなく、それが何らかの新しい発見や説明に結びついているかどうかに重点を置いて評価してくださった結果だと思っております。分野の違いを乗り越えて、このような評価をしていただいたことは、今後の連合大会にとっても朗報であり、新しい時代を切り開く道が見えてきたような気がします。

重ねて、参加会員のご協力に感謝いたします。

5.4 コンペセッション最優秀賞・優秀賞受賞者の言葉

[1] 最優秀賞

慶應義塾大学理工学研究科 島津 秀康

このたび、東京都東久留米市自由学園で30年以上観察されてきた野鳥羽数調査データを解析した結果、明らかになった野鳥羽数と観察地周辺の環境変化との関係について報告しました。これまで国内では、長期的な羽数調査データを扱った本格的な解析は進んでおらず、その重要性が指摘されていました。今回、局所回帰を用いた2段階平滑化の手法を用いて羽数時系列を長期トレンド、短期トレンド、ノイズの3成分に分解した結果、観察地周辺の宅地面積の拡大に伴って増加した鳥と、田畠の縮小により減少した鳥とに分類されることが明らかになりました。また、短期的な傾向からは鳥の生態的生周期を読み取ることもできました。このように一本の羽数時系列に適切な数理モデルを導入し、これまで経験的にしか理解されていなかった羽数の変動構造を具体的に記

述することで、今後の議論に役立つ結果が得られました。もちろん、今回の結果は一ヶ所での結果ですが、他の場所でも同様な解析を行うことで新たに多くのことが明らかになると考えています。

今後、この榮誉ある貴重な体験を励みに、更なる努力を重ねていきたいと思います。最後になりましたが、日頃、熱心にご指導くださる先生方をはじめ、研究室の皆さんに感謝申し上げます。

[2] 優秀賞

総合研究大学院大学数物科学研究科 逸見 昌之

この度のコンペセッションで、私が優秀報告賞の一人に選ばれましたことにはいささかびっくりしておりますが、大変光栄なことであります。まずこの場をお借りして報告を聞いて下さった方々や関係者の方々にお礼申し上げたいと思います。私はもともとプレゼンテーションが下手で、今まで研究発表をする度に苦心しておりましたので今回の受賞は全く予想外でしたが、大変励みになりました。また、発表後に、研究の内容やプレゼンテーションの仕方について個人的にいくつかの有益なコメントもいただけましたので、それも今回のコンペセッションに参加した収穫と思っております。今回のような企画は、研究の内容だけでなくその内容をいかに伝えるかということにも注意するきっかけになり、またより多くの人に自分の研究を聞いてもらえる場として若い人たちの勉強や励みになると思いますので、これからもそのような場として長く続いていると思っております。

[3] 優秀賞

日本学術振興会特別研究員 小西 葉子

日本統計学会での初めての発表は2001年度の69回大会でした。参加者の皆さんのレベルの高さに驚くとともに自分の準備不足に自己嫌悪に陥ったのをよく覚えています。翌年の70回大会では、前回の反省を踏まえたにも関わらず、質問に対して満足のいくリプライができず再度反省しました。私の専門は経済学ですが、他分野の研究者の方々が参加される統計学会での発表は、とても良い勉

強になると同時にレベルの高さ故に大変緊張します。

今年は3度目の挑戦として自分にプレッシャーをかける意味でコンペティションに参加しました。当日は聴衆の方々に理解が容易なプレゼンテーションを行い、有益なコメント・質問が頂ければと臨みました。発表を終えて反省する所は勿論ありましたが、今までで一番気持ちよく発表できました。

今回の入賞によって、少しプレゼンテーションに対する苦手意識が軽減され自分に自信を持つことができました。表現することへの努力に終りはありませんが、一つの通過点としてとても喜んでおります。

最後にコンペティションセッションを企画・運営してくださいました諸先生方、また学会期間中審査に参加してくださいました皆様方に厚く御礼申し上げます。

[4] 優秀賞

東京大学情報理工学研究科 清 智也

このたび、統計関連学会連合大会コンペセッションにおいて優秀賞を受賞しましたことを、大変光栄に思います。常日頃から並々ならぬご指導を下さった駒木文保先生、またゼミや発表練習で貴重なご意見を下さった研究室の皆様、その他関係者の皆様には心より感謝致します。

修士課程の頃より連続時間確率過程に関する統計理論に興味を持って勉強してきましたが、博士課程に進んでから具体的な研究テーマに悩んでいました。そこへ駒木先生からLAMN（局所漸近混合正規性）に関する推測理論を研究してみてはどうかという提案を頂き、その後も同先生と議論を重ねていくうち、情報量規準を構成してみようという運びになりました。LAMNと予測という2つの観点から情報量規準を導出したことが、今回の発表の主な結果です。LAMN性を持つ具体的なモデルとしては拡散過程の離散観測モデルを扱いました。まだまだ不完全な箇所がありますが、今回受賞できたのは皆様に興味を持って頂ける研究内

容であったのだと受け止めております。今後は、本研究内容を発展させていくとともに、統計的推測理論の構築に少しでも貢献できるよう努力して

いく所存です。これからもご指導をお願い致します。

6 2004年度統計関連学会連合大会について

企画委員会委員長 柴田 里程

今年度とおなじく、日本計量生物学会、日本統計学会、応用統計学会の3学会の連合大会として、2004年9月3日（金）から6日（月）の日程で、岩手県花巻市の富士大学（<http://www.fuji-u.ac.jp>）を会場として開催されます。統計関連学会連絡委員会のもと、すでに企画委員会と実行委員会が立ち上がり、準備を始めていますが、今大会に引き続き連合大会としての実をあげるため、できるだけ会員のご意見を反映する形で企画立案していくたいと思っております。たとえばチュートリアルセミナーに関しても、なるべく多くの会員に関心をもっていただけるようなテーマをとりあげる

のが望ましいと思っております。このようなことをスムーズに行うためにも必要な連合大会独自のWebページを近日中に開設致しますので、ぜひここを積極的に利用してご提案、ご意見をお寄せください。もちろん、統計関連学会連絡委員会、連合大会企画委員会、連合大会実行委員会などからも、できるだけ多くの情報をこのページを介してタイムリーに会員の皆様へ流していきたいと思っておりますので、よろしくご協力のほどお願い致します。URLは<http://www.ajss.gr.jp>となる予定です。

7 ISI 2003に参加して

高崎健康福祉大学 入戸野 健

さる8月13日から20日にかけてベルリンにてThe 54th Session of the International Statistical Institute 2003が開催されました。私のISIセッションへの参加は第52回のヘルシンキ以来、2回目となるものです。

今回のセッションでは各国から総計2400人余りの参加者が集まり、日本からも127人という多数の研究者が参加しました。ちなみに、ベルリンでの開催は1903年の第9回以来、ちょうど100年ぶりらしく、参加人数もさることながらこの会議の歴史や伝統を感じさせます。

会場となったThe International Congress Centre (ICC) はベルリンの中心的繁華街であるツォー駅周辺からはバスで20分ほどの距離に位置する近代的な造りの建物で、大小80のホールや部屋から

なる内部は、各フロアをつなぐエスカレーター やラウンジが空間的にアレンジされた広く立派な会場でした。

会場内の参加者へのサービスとしては、各種インフォメーションカウンターやインターネット接続エリア、発表者用ラウンジなどが用意されていましたが、特に、発表用のパワーポイントのデータなどは前日までに発表者用ラウンジでスタッフのサポートのもと、会場のサーバに転送しておけば、当日は手ぶらで話に行くだけ、ということもできるような便宜も図られていました。実際、私も含めて、サーバに転送しておき、当日は各部屋に備え付けのPCを使う発表者も多かったようです。また、ICCの建物内全体が無線LANの接続可能エリアになっていて、発表者が発表の中でイ

ンターネットへ接続して実演して見せたり、聞く側はスライド中に提示されたURLにその場でアクセスして確認するなどの活用がなされていました。その他、ラウンジやレストランで昼食の傍らなどにメールをチェックするといった光景も見かけました。参加者への便宜と言えば、開催前のWebでの最終参加登録の後、会期後の特定期間まで使用できる各自のメールアドレスとWebストレージが提供され、参加者同士のデータ交換やメールコミュニケーションへのより一層の配慮もなされており、このようなサービスは試行錯誤されながらも年々密度の濃い内容になる傾向にあるものと感じました。

さて、セッションのプログラムについてですが、私が前回参加した第52回には無かったポスター発表なども加わり、従来からのテーマ毎に分かれての各ミーティングルームで同時進行する発表と合わせると、その膨大な発表件数には、あらためてISIの規模の大きさを感じます。ホールや部屋の大きさによって各ミーティングへの参加者数に若干の多少はありましたが、どこでも質問やコメントなど、活発な意見交換が行われ、これらを通じて非常に多くの知見を得られたことは、今回も大きな収穫でした。

大会プログラムは研究発表の他にも例年通り様々な企画が用意されていましたが、今回の参加は2度目ということで、レセプションやパーティーなどにも積極的に参加しようと考えていました。初日にはレジストレーションの後、オープニングセレモニーとウェルカムレセプションが催されました。レセプションでは「ツアラトゥストラはかく語りき」をBGMに、それまでセレモニーが行われていた舞台背面の幕が上がるとき、その奥にミニチュアのブランデンブルク門などで装飾されたレセプションホールが現れるといった大がかりな演出が印象的でした。14日の夕方にはクラシックコンサートが開催されました。ベルリンでもっとも美しい広場と言われるジャンダルメン

マルクトの中央に建つコンサートホールでの演奏会は、クラシック音楽とホール建築の中世的な雰囲気との調和がとても新鮮でした。15日の夜はドイツ政府主催のレセプションに参加しました。ドイツ内務大臣からのメッセージの後、参加者同士の懇談では、プラハから参加した若手研究者と話す機会を得て、お互いの事や国の様子などを話し、雑談を交えながら和やかな雰囲気の中で交流を持つことができました。最終日の前夜は、前回は参加しなかったフェアウェルパーティーに参加しました。NOC議長の挨拶などに続いて、バンド演奏や芸人による数々のレクリエーションが華やかに行われました。また、自主参加によるダンスタイムなどもあり大盛り上がりっていましたが、私にとってはテーブルに同席したハイデルベルクの研究所から来られた先生との会話も、貴重なコミュニケーションの一つとなりました。研究についての考え方や周囲の環境など、ドイツの研究事情に関する一研究者としての意見なども聞くことができ、興味深いものでした。

ところで、ベルリン市街は観光名所も多く、会場のインフォメーションで入手した観光マップなどを見ながらいくつかを回ってみましたが、特に印象深かったのはベルリン大聖堂で、近くのベルガモン博物館で古代の彫像や遺跡を訪ねた帰り途に聞いた鐘の音は、莊厳な大聖堂から叙情的な響きをベルリン市街に放っていました。実は昨年の8月にもCompstat2002でベルリンを訪れていたのですが、今年は本物のブランデンブルク門（昨年は改修中で門には門の絵が描かれた覆いが被されていた）を見ることができたのもちょっとした収穫です。

今回の参加では、自分の発表時も含め、ミーティング中の数々の情報交換の中から専門研究に関する多くの知見を得られたことが最大のメリットでしたが、同時にレセプションなどで海外の研究者とさらなる交流を持つことができたことも、私にとって大変貴重な体験になったと言えます。

8 計量経済・計量ファイナンス分科会について

京都大学経済学研究科 森棟 公夫

計量経済学および計量ファイナンス分野の研究・教育ならびに実務に携わる会員を中心となって設立した分科会です。現在のところ、山本拓（一橋大）、前川功一（広大経済）、本多佑三（阪大経済）、国友直人（東大経済）、佃良彦（東北大経済）、柿沢佳秀（北大経済）、谷崎久志（神大経済）が幹事を努めています。設立が認められてからまだ半年ですが、1月には京都大学経済学部でシンポジウムを開きました。これは関西計量経済研究会との共催の形でしたが、東京からの参加者5名、海外からの報告者3名も含めて参加者39名

を得ました。発表は応用中心でしたが、実務に携わる方々による計量ファイナンスの応用に関する報告が増えることを期待しています。9月の日本統計学会でも分科会としてセッションを持ちたかったのですが、準備が間に合いませんでした。済みません。詳細は決まっていませんが、この冬には東京と京都の両方でシンポジウムを開催する予定ですので、気楽にご参加ご報告下さい。分科会への参加も自由ですので、連絡いただければ幸いです。森棟公夫（京大経済、morimune@econ.kyoto-u.ac.jp）

9 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまで多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

募集は毎年行いますので、前年採用された1な

いし2部会とあわせて、1年度中に4つから5つの部会が開かれることになります。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2003年11月14日

応募先：日本統計学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

応募書類の書式などは事務局までお問い合わせください。採用は、12月に開かれる評議員会にて協議の上、決定いたします。

10 科学研究費への応募促進について

東京大学大学院情報理工学系研究科 竹村 彰通

平成16年度の科学研究費の応募の時期となりました。会報等でお知らせしておりますように、14年度まで複合領域の分科であった「統計科学」が、15年度からは総合領域の情報学分科の中の一つの

細目となっています。統計科学は赤池弘次先生をはじめとした先人の努力により分科としてたてられたもので、このような変更は残念なことですが、その一つの原因是統計科学への申請件数が少なか

ったことがあります。

平成16年用の公募要領などの書類は、日本学術振興会の科学研究費のホームページ

<http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/index.html>から入手することができます。このホームページには科学研究費に関するさまざまな情報が提示されております。例えば平成15年度の統計科学への新規課題申請件数が165件となっています。これに対して平成14年度には146件でしたので、1割程度の増加が見られていますが、さらに来年度にむけて申請件数・申請額の増加が望されます。

研究資金の流れが競争的資金へとシフトしつつある中で、科学研究費の獲得は、統計研究者の集団の存在を認識させるという意味も持っております。

極めて重要です。申請の資格を持った統計研究者は統計科学への応募を是非ご検討ください。すでに科学研究費を継続中の方も、萌芽研究への応募などの可能性がありますので、こちらもあわせてご検討ください。なお、統計科学が細目になったことに伴って、審査員は必ずしも統計関係者とは限りませんので、申請書を作成する際には、統計関係以外の方々にも理解できるような申請書の書き方が望れます。

なお、統計研究者の中には「経済統計学」あるいは「数学一般(含確率論・統計数学)」に応募される方もおられると思われます。研究者の関心に応じてこれらの分野への応募もご検討いただくようお願いいたします。

11 日本学術会議報告

九州大学大学院数理学研究院 柳川 勇

吉村 功第18期会員の後任として第19期日本学術会議会員に選ばされました。重責に身が引き締まる思いです。吉村前会員の方針を引き継ぎ、学会との密な連携を目指して日本学術会議の報告を逐次行って行きたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

7月22~24日に第140回総会(19期第1回総会)が開催されました。会長、役員、各種委員会委員の選出が主な議題でした。2期以上にわたって会員を続けておられる方が過半数以上おられることに驚きました。総会や部会は、それら常連の方々のイニシアチブの下で進行し、すべての初体験がそうであるように目を白黒にしている間に終了しました。新会長は、黒川 清会員(第7部:東海大学総合医学研究所教授)、新副会長は戒能道厚会員(第2部:早稲田大学法學部教授、名古屋大学名誉教授)、岸 輝夫会員(第5部:物質・独立行政法人材料研究機構理事長)が選出されました。また、統計学が所属する第4部の部長は、郷信広会員(日本原子力研究所特別研究員、京都大学名誉教授)が選出されました。現在19期の活動

方針と活動計画が検討されています。以下、私どもに関連ある統計学研究連絡委員会(以下、統研連と略記)とその周辺の報告です。

・統研連の委員について

統研連は、日本統計学会、行動計量学会、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本数学会統計数学分科会の6学会から選出された委員、および日本学術会議の7つの部の各部から推薦された日本学術会議会員から構成されています。他の研連とは異なって、日本学術会議の各部から会員1名が加わっているのが特徴です。統計学の学際性が考慮されています。18期までは、統研の定員は14名でした。しかし、すでに吉村前会員から報告されたように「課題別研究連絡委員会」発足のため第19期では定員が1名削減されました。このため、日本統計学会には委員を2名から1名に減少していただき、他の5学会には、従来どおり1名をお願いすることにいたしました。研連の委員は、10月下旬ごろに正式任命の見込みです。

・研連の将来について

吉村前会員の報告ですでにご存知のように、日本学術会議は新体制に向けて大改革されます。その大枠は第18期の改革推進委員会の議論を経てすでに決まっており、すでに来年4月の国会上程を目指して、法改正に向けた作業が関連省庁で進行中とのことです。新体制の日本学術会議では、従来の「研究連絡委員会」は消滅し、代わって限時的に設定される「課題別委員会」が構築されます。したがって19期の統研連は最後の統研連となり、任期も短縮される見込みです。「課題別委員会」の「課題」は学問「分野」により構築することもできるし、また「新たな課題」ごとに組織することもできると言われています。第19期統研連の重要な役割は、統計学関連学協会と密接な連携を保ち続けることができ、かつ時代の要請を反映した「課題」を冠した統計学関連の「課題別委員会」

をいかにして構築するかについて英知を傾注することにあるのではないかと推察されます。

なお、新体制での日本学術会議は、現行の7部制を「人文社会系」「生物生命系」「理工系」の3部へ、現行2370名の研連委員と同数の「連携会員」を設け「課題別委員会」に配属する。また、日本学術会議会員は、「選考委員会」を設置し30名程度の委員を委嘱、「選考委員会」が現行と同数の210名を選考する方向で法制化されるようです。法案は大枠だけで、細かなところは新しい学術会議で決定の方針と言われていますが、学協会・学問領域から距離をおき、浮いてしまった「科学アカデミー」となる可能性が強く心配されています。そうならないよう19期日本学術会議の動向を、特に厳しい目で見ていく必要があるのではないかでしょうか。

12 第71回日本統計学会総会報告

日時：2003年9月3日（水）12：10～13：10

場所：名城大学 共通講義棟101号教室

開会：国友直人理事長

1. 会長挨拶：藤越康祝会長より、大会運営関係者への感謝の言葉が述べられ、今大会の開催状況の概略が述べられた。
2. 議長選出：美添泰人会員を議長に選出した。
3. 2002年度事業報告、同決算報告、および会計監査報告：藤澤洋徳庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて事業報告案および決算報告案の説明、引き続き垂水共之監事より会計監査報告がなされ、承認された。
4. 評議員会からの報告：藤越康祝会長より、和文誌を年2回発行とする意向であること、賞の新設を検討していること、統計関連学会の連合について学会組織検討委員会で検討をしていることの報告があった。
5. 2003年度事業計画と同予算について：南庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて事業計画案と予算案の説明があり、質疑応答のあと、ともに承認された。

6. 第72回大会について：国友直人理事長より、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会の連合大会として岩手県花巻市の富士大学で開催する案が示され、承認された。
7. 名誉会員について：藤越康祝会長より、9月2日に開催された評議員会において、藤井光昭会員、杉山高一会員、鍋谷清治会員が名誉会員として推薦されたことが説明され、承認された。
8. その他：総会の式次第に記載されていた「会則改正の提案」を取り下げたことについて慎重すぎのではないかとの意見が出された。そこで「現在の会則上では統計学会の入会希望に際して必要となっている推薦者2名をなくすという趣旨」については了承し、会則の文言は理事会で再度検討し、評議員会で承認を得ればよいという提案が出され、承認された。
9. 日本統計学会賞・小川研究奨励賞の報告：藤越康祝会長より、日本統計学会賞受賞者3名

2002年度事業報告

(2002.4.1～2003.3.31)

1. 日本統計学会第70回大会の開催
2002年9月7日、8日、9日、10日の4日間にわたり、明星大学において開催した。

- 統計開連学会連合大会の一環として開催した。

2. 第70回大会講演発表集を発行
連合大会の講演報告集に含まれる。

3. 会報の発行

- Vol.32 No.1 (6月改文版), No.2 (12月改文版), No.3 (12月和文誌) を発行した。

4. 会報の発行

- No.11 (4月), No.12 (7月), No.13 (10月), No.14 (1月) を発行した。

5. 費の授与

- 第7回日本統計学会賞, 第16回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。

6. 楠原部会の活動

- 「統計分野におけるインターネットの活用」(森裕一主査) : 2000年11月発足, 2002年11月終了

- 「非線形時系列解析と金融工学II」(谷口正臣主査) : 2000年11月終了, 2002年11月終了

- 「QOL測定尺度構成の研究」(丸山久美子主査) : 2001年12月発足, 2003年11月終了予定

- 「電子社会における統計教育のあり方にに関する研究」(村上鉄蔵主査) : 2001年12月発足,

- 2003年11月終了予定

- 「多重比較とその関連分野の統合的研究」(篠谷稔成主査) : 2002年12月発足, 2004年12月終了予定

7. 研究分科会の活動

- 「統計教育分科会」(村上鉄蔵主査) : 2002年12月発足, 2006年12月終了予定

- 「計量経済・計量ファイナンス分科会」(佐藤公人主査) : 2002年12月発足, 2006年12月終了予定

- 「統計・ミュレーション研究分科会」(杉山高一主査) : 2002年12月発足, 2006年12月終了予定

8. 各種委員会の活動

- 評議会, 理事会, その他の各種委員会を開催した。

9. 各種選考の実施

- 会長選挙, 評議員選舉, 学術会議員選挙を行った。

10. その他

- (i) 国際交流を推進した。

- (ii) インターネット経由での情報発信を促進した。

- (iii) 統計開連学会の連携を進めた。

- (iv) 会員メイリングリストを構築した。

- 会計監査報告書

- 2003年7月30日

- 日本統計学会則第22条にもとづき, 2002年4月1日より2003年3月31日までの会計結果を監査した結果, 決算書のとおり相違ないことを認めます

監査

- (i) 会員登録を発行する。
(ii) 国際交流を推進する。
(iii) インターネット経由での情報発信を促進する。
(iv) 統計開連学会の運営を助める。

- (v) 人々が個人の方策の検討・実施

日本統計学会則第22条にもとづき, 2002年4月1日より2003年3月31日までの会計結果を監査した結果, 決算書のとおり相違ないことを認めます

監査

寺澤　亮太
監査

〈2003年度予算〉

[2003] F. 3 H 1 [¶ 47]

卷之三

年 月	方 面	開 支	科 目	資 金	方 面
固 定 資 產 :		2,056,367	学会自己資金	2,056,567	
流動資產:		9,922,340	学会活動基金	5,000,000	
現 金		9,163	流动资金	290,000	
預付款項		14,921	名義的帳面立金	690,000	
預 賓		9,938,255	OA機器基金	1,200,000	
			非賑災應急基金	1,850,000	
			總 基 金	1,132,310	
合計		12,035,907	計		12,035,907

卷之四

利 目		額		日
今 利 拨 入 金	1,132			1. 1.32
会 员 贡 献 金	200			200
OA 費 用 貢 献 金	100			100
投 打 賽 賽 金	100			100
名 答 賽 賽 金	600			600
会 员 取 入	10,639	名 答 賽 會 會 員 學 生 會 會 員 獎 分		9,390
會 员 人 費	1,500			600
住 休 會 人 費	120			700
科 學 會 人 費	1,900			1,300
「研 究 會 」人 費				120
「學 格 定 期 頒 行 金				1,000
施 收 入	1,902	會 建 路 茂 科 利 子 報 入 宏 告 報 入		700 2 1,200 ¹¹ 700 ¹²
大 会 会 人 費				18,052

2002年电子管文

1) 会場の広告掲載費70万円、名簿印刷費50万円
2) 会場大会が強制として独立運営であるため、大会運営の予算はまとめて記載している。
株式会社から注金会へ分担として支出し、運営大会終了後に清算会へ返済予定。

卷之三

卷之三

印 刷 料	4月	3月	会 費	3月	会 費	3月	会 費	3月
大 会 開 催 費		7,174	会 費	(3月 1,2,3,5)	4,651	会 費	1,200	会 費
研 究 活 動 費			会 費	(1月 115~116)	7,200	会 費	7,200	会 費
研 究 分 会 費		715	分 扱 金	700	15 ^b	分 扱 金	400 ^a	分 扱 金
學 會 連絡 会 費		300	會 議 會	300				
研 究 分 会 費		60	會 議 會	60				
學 會 連絡 会 費		390	學 會 連絡 会 費	100				
印 刷 料	4,329		學 會 連絡 会 費	AC				
通 告 - 勘 診 費	-	3,185	學 會 連絡 会 費	20				
各 种 分 会 費		115	學 會 連絡 会 費	180				
各 种 分 会 費		20	學 會 連絡 会 費	20				
OAK 論 著 費	100		日本經濟学会 費	35				
日 本 資 料 会 会 費	150		1 S 1	25				
日 本 資 料 会 会 費	300		信 息 學 會 費	50				
印 刷 料	165		日 本 地 球 地 球 學 會 費	5				
印 刷 料	18,053							

(杉浦成昭氏、長谷川政美氏、松田芳郎氏)と小川研究奨励賞受賞者(柿沢佳秀氏)が受賞理由とともに紹介され、引き続いて、授賞式が行なわれた。受賞者が簡単な挨拶をおこなった。

10. ロゴマークの発表：国友直人理事長より、ロ

ゴマークの公募から決定までの経緯が説明され、評議員会で決定されたロゴマーク案が発表された。創立年を入れるなどの提案が出された。細部についてはまだ修正の余地があるので提案があれば出して欲しいとの要望が出された。

13 2002・2003年度第6回理事会議事録

2002・2003年度第6回理事会議事録

日時：2003年6月21日（土曜日）12：10～17：20

場所：統計数理研究所会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、久保川達也、加納悟、柴田里程、岩崎学、倉田博史、和合聰、宿久洋、大屋幸輔、中野純司、赤平昌文、竹村彰通、藤澤洋徳、南美穂子

<議題1>会長、理事長、各理事からの報告

[会長] 藤越会長より、資料に基づき韓国統計学会大会への協力についての説明があった。また、横断型基幹科学技術研究連合の出版委員会に竹村会員を推薦したこと、「統計の事典」の編集は当面は行なわないことにしたとの報告があった。

[欧文誌] 久保川担当理事より、前回理事会以降に採択された論文が2本、不採用が4本で、今年になって受け付けた論文15本のうち外国からは8本であること、33巻1号は7月に発刊の予定であることの報告があった。韓国統計学会との編集委員の交換の同意書は編集委員会の間での事務的な取り決めとすることにした。また、英語でシリーズものとして本を出版する話が出ており、今後前向きに検討していくことになった。

[和文誌] 加納担当理事より、引継いでからこれまでに投稿された論文が10本、採択されたものが2本、不採用が1本、取り止めたものが1本あり、残りは審査中であるとの報告があった。

[広報] 宿久担当理事より、会報NO.116は7月発行予定であること、HP担当は大阪大学の大屋幸輔会員が引継ぐとの報告があった。

[涉外] 赤平担当理事より、6月7日に行われた統計関連学会連絡委員会で来年の連合大会を富士

大学で開催することにしたとの報告があり、国友理事長が経緯について説明した。

[大会関係] 和合担当理事より、4月に実行委員会が行なわれたあと、6月7日に連絡委員会が行なわれ、連合大会に関してもそこで多くのことが決定されたこと、日本行動計量学会が連合大会を協賛することになったこと、ポスターは予定より増やして800部印刷としたことの報告があった。

[企画] 岩崎担当理事より、前日（6月20日）が連合大会の講演申し込み締め切りであったとの報告があった。中野情報担当理事より、連合大会の講演受付など計算機関係の実際の仕事が藤原情報幹事に集中したので、来年以降は負担を関係者の間で分担する方向にして欲しいとの要望が出された。柴田担当理事より、ネットワーク関係の情報を実行委員会で調べて教えて欲しいとの要望が出された。

[情報] 中野担当理事より、応用統計学会がメーリングリストを統計学会のサーバーで立ち上げたとの報告があった。

[理事長] 国友理事長より、連合大会連絡委員会が6月7日あったこと（議事録案配布）の報告があった。

<議題2>統計学会賞、小川研究奨励賞受賞者について

藤越会長より、日本統計学会賞審査委員会を午前中に開催し受賞者を決めたとの報告があった。久保川欧文誌担当理事より小川研究奨励賞候補者はこれから決める予定であるとの報告があった。

<議題3>協賛について

国友理事長より、統計数理研究所主催のISMシン

ポジウムとシンポジウム'Science of Modeling'に協賛することにしたとの報告があった。

<議題4>総会の議題

資料に基づき、議題の検討が行なわれた。

<議題5>2002年度事業報告案及び決算案、2003年度事業計画案及び予算案

藤澤庶務会計担当理事より2002年度事業報告案及び決算案について説明がされた。南庶務会計担当理事より2003年度事業計画案及び予算案について説明がなされた。審議の結果、小修正の後に承認され、評議員会および総会へ諮ることが決まった。

<議題6>学会賞、小川研究奨励賞の賞状等について

加納和文誌担当理事が担当することになった。

<議題7>評議員会の開催日時と議題

評議員会は9月2日19:30より開催されることになった。資料に基づき議題の検討が行なわれた。

<議題8>賛助会員を増やす方策について

南庶務会計担当理事より、資料に基づき説明があり、検討を行なった。

<議題9>会報に求人広告欄を設けることについて

南庶務会計担当理事より、資料を参考に会報に求人広告欄を設けるという提案について説明があり、承認された。ただし、広告を募集する方法についてはもっと検討した方がよいとの意見が出された。

<議題10>入会案内の改訂について

瀬尾涉外担当理事の代理で南理事が入会案内の改訂版について説明をし、変更すべき点などについて意見が出された。

<議題11>入会申し込み、名簿改訂用記入用紙について

南担当理事より、入会申し込みの改訂案と名簿改訂用記入用紙案について説明があり、記入項目に

ついて意見が交換された。前回の理事会で決まったように、入会申し込みの推薦人記入欄をなくし備考欄に任意で知り合いの統計学会員の名前を書くよう変更された。

<議題12>会則の変更について

藤澤担当理事より、資料に基づき、長期滞納者の扱いと入会者の推薦者をなくすことにに関する会則の変更案の説明があった。入会者の承認に評議員の議決を経る必要はないのではないかという意見が出され、議論の結果、入会者の承認は理事会で行い評議員会に報告するというように変更することを評議員会に諮ることにした。

<議題13>慶弔申し合わせについて

藤越会長より、資料をもとに、説明があった。

<議題14>ロゴマークについて

国友理事長より、瀬尾理事が作成した資料をもとに、ロゴマーク応募作の理事による投票結果の説明があった。この結果を元に候補を絞り、評議員会で投票して決定することとした。

<議題15>論文賞について

国友理事長より、論文賞についてはワーキンググループで議論したが1つの意見にまとまらなかつた。議論の内容については文書化し学会活動特別委員会に提出して検討してもらうことにしたとの報告があった。

<議題16>入会者、退会者の承認について

賛助会員2団体、会員25名の退会が承認され、25名の入会が承認された。

<議題17>統計関連学会の協調・連合について

藤越会長より、資料をもとに、統計関連学会の協調・連合の経緯について説明があり、今後のあり方について意見を交換した。

次回理事会は9月20日（土）に開催する予定である。

14 会合案内

■・科学研究費による研究集会の案内

(S 1) 「量子推測理論の数理統計学的基礎とその応用」「基盤研究A(1)」(研究代表者：赤平昌文, 課題番号14204006)によるシンポジウム計画一覧表(平成15年度分)

1. 数理統計学と計量心理学をつなぐ

研究分担者：狩野 裕(大阪大・人), 千野直仁(愛知学院大・文)

日 時：平成15年11月3日(月)～11月5日(水)

場 所：大阪大学人間科学部東館207教室(ユメンスホール)

内容・目的：方法論と実質科学は車の両輪であり互いに情報交換することでそれぞれの学問を発展させることができる。本シンポジウムは、実質科学として心理学や行動学などの社会科学を念頭におき、それらの分野におけるデータ科学的方法論を、数理統計学と計量心理学的立場から議論したい。議論したいトピックは幅広く、(i) 反復測定データの分析、線形・非線形混合モデル、(ii) 因果推論、欠測データの分析、グラフィカルモデリング、構造方程式モデリング、(iii) 独立成分分析、多次元尺度法、因子分析などの多変量解析、などを考えている。

また、問題提起、サーベイ、応用研究、数理統計学者から計量心理学者への提言、計量心理学者から数理統計学者への提言なども歓迎する。旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない

講演申し込み期限：10月10日(金)

申込先：〒565-0781 吹田市山田丘1-2

大阪大学大学院人間科学研究所

狩野 裕

TEL: 06-6879-8052 FAX: 06-6879-8052

E-mail: kano@hus.osaka-u.ac.jp

予稿集：予稿集を作成します。講演者の方は、予

稿(A4サイズ)を予稿送付期限までにお送りください。なお集会報告書を作成しますので、講演者の方に別途、原稿の作成(A4サイズで2枚)を依頼します。

予稿集送付期限：10月17日(金)

予稿送付先：上記申込先と同じ

2. 統計的推測の理論とその応用

研究分担者：高田佳和(熊本大・工), 岩佐学(熊本大・工)

日 時：平成15年11月17日(月)～11月19日(水)

場 所：熊本大学大学院自然科学研究棟2階ゼミナール室

内容・目的：統計的推測に関する様々な理論や方法論、それらの新しい展開、その応用例についての発表と討論を行う。研究成果の発表だけでなく、これらに関わる最新の話題や研究の紹介、新たな問題の提起等の講演も歓迎します。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない

講演申し込み期限：10月17日(金)

申込先：高田佳和

〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1

熊本大学工学部数理情報システム工学科

TEL: 096-342-3625 FAX: 096-342-3609

E-mail: takada@cs.kumamoto-u.ac.jp

予稿集：予稿集を作成します。講演者の方は、予稿(A4サイズ)を予稿送付期限までにお送りください。なお集会報告書を作成しますので、講演者の方に別途、原稿の作成(A4サイズで2枚)を依頼します。

予稿集送付期限：10月31日(金)

予稿送付先：上記申込先と同じ

3. データ解析のための統計科学理論

研究分担者：白石高章(横浜市大・理), 濑尾

隆（東京理科大・理）、加藤 剛（慶應大・理工）
日時：003年12月10日（水）～12月12日（金）
場所：横浜市立大学よこはまアーバンカレッジ
TEL: 045-841-5900 〒233-0002 横浜市港南区上
大岡西1-6-1 ゆめおおおかオフィスタワー17階
(京浜急行上大岡駅より徒歩約5分、市営地下鉄
上大岡駅より徒歩約3分) 会場までの順路は
<http://crystal.sci.yokohama-cu.ac.jp/meet15.html>
をご覧ください。

内容・目的：より小さなコンピュータとOSの発展により、多くの分野で統計データの解析が行われている。本シンポジウムでは、パラメトリック、ノンパラメトリック、セミパラメトリックを問わず、データ解析に有用な統計手法と理論について研究発表及び討論を行い、今後の研究の方向性について展望する。まだデータ解析に利用できるか不明であるが可能性のある統計手法の理論も歓迎する。また、研究成果に限らず、最新の話題の理論紹介も歓迎する。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない。

申込期限：11月10日（月）

申込先：白石高章

〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2

横浜市立大学大学院総合理学研究科
数理科学部門

e-mail: crystal@yokohama-cu.ac.jp

Tel: 045-787-2195

予稿集：講演者の方は、A4サイズの予稿の原稿（ページ数は15ページ以内）を予稿送付期限までにお送り下さい。なお、集会報告書を作成しますので、講演者の方に別途、報告書用原稿の作成（A4サイズで2枚程度）を依頼します。

予稿送付期限：12月5日（金）

予稿送付先：上記連絡先と同一

懇親会：12月11日（木）夕方、参加希望の方で10日にシンポジウム会場に来れない場合は12月5日までに『懇親会参加』と白石に連絡のこと。

（S2）「統計的領域推定における精確な推定方式の開発と実用化の試み」「基盤研究（B）」（研究代表者：赤平昌文、課題番号12554002）によるシンポジウム計画一覧表（平成15年度分）

1. 実験計画法とその周辺における組合せ的構造の解明とその応用

研究分担者：白倉暉弘（神戸大・発達科学）、棄田正秀（広島大・総合科学）

日時：2003年12月4日（木）～6日（土）

場所：白浜かんばの宿

〒649-2211 和歌山県白浜町1688-2

TEL: 0739-42-2980 FAX: 0739-42-2978

URL: <http://www.kampo.kfj.go.jp/shisetsu/yado2/1292shirahama/index.html>

内容・目的：統計的計画の考察から発展してきた実験計画法は、今日では離散数学あるいは組合せ理論の一部としても確立し、実験計画以外の分野への応用も盛んになってきた。本シンポジウムでは、実験計画法とその周辺に関する最新の話題やその推測理論に関する研究発表及び情報交換を行う。実験計画・デザイン理論の最適性、構成、推定方式に関する話題、またはその他への応用も歓迎する。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない。ただし、同宿に宿泊を希望する参加者は9月3日（水）までに白倉（sirakura@kobe-u.ac.jp）に連絡して下さい。

申込期限：10月27日（月）

申込先：棄田正秀

〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1

広島大学総合科学部

E-mail: kuwada@mis.hiroshima-u.ac.jp

TEL: 0824-24-6468 Fax: 0824-24-0756

問い合わせ先：上記申込先と同一

予稿原稿：各自予稿（ページ数は問わない）を当日30部持参すること。集会報告書は後日作成するので、発表者には別途原稿作成（A4サイズで2頁程度）を依頼する。

15 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて1,000字以内をめどに原稿をお送りください。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教官公募）なども受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。（1）氏名、（2）学位名、（3）取得大学名、（4）論文タイトル、（5）主査名（指導教員）、（6）連絡先（e-mailアドレス）をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35

鹿児島大学理学部 宿久 洋宛

Tel: 099-285-8040 (ダイヤルイン)

Fax: 099-285-8040

E-mail: kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル内

財団法人統計情報研究開発センター

日本統計学会係

TEL: 03-5467-0481, FAX: 03-5467-0482

E-mail: jstatsoc@sinfonica.or.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

水野 坦名誉会員（2003年9月9日）

久武 雅夫名誉会員（2003年10月8日）

退会者

（財）日本労働文化協会（賛助会員）、施招雲、小池将貴、三宅章彦、斎藤金一郎

現在の会員数（2003年10月1日現在）

名誉会員	23名
正会員	1355名
学生会員	197名
総計	1575名
賛助会員	19法人
団体会員	4団体

・統計関連学会ホームページURL：

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス：

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス：

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス：

jimu@jss.gr.jp